

札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

No.79
July 2023

ニホンザリガニ

エビやカニと同じ甲殻類で、アジアザリガニ科の水辺の生き物です。世界中でも北海道と東北地方北部にしか生息しない固有種で、国や札幌市の絶滅危惧種となっています。2006年～2007年に博物館活動センターが行った藻岩山・円山における動物生息状況調査では、山麓部の沢で水温が低く、礫れきが多い場所で確認されています。



撮影：西村 孝幸

「博物館」を意味する英語Museumの語源であり、喜びを表すmuse(ギリシャ語)と通信や手紙を意味するLetter(英語)からMuseLetterと名付けました。

牧野富太郎が予見した

タンポポの乱

文／学芸員 山崎 真実

札幌市博物館活動センターの花壇では札幌に関係する植物を植えています。ビールの原料になるセイヨウカラハナソウ(ホップ)や、茎の繊維がロープや布などの材料になるアマ(亜麻)、布や糸を青く染める草木染の原料となるタデアイ(藍)などです。こうした植物の中には北海道の開拓期に海外から種や苗を取り寄せ、札幌で植えてテストされた後に北海道内各地に広まっていったものもあります。中でも札幌にやってきた外国産の植物で畑以外の場所にも広まった、誰もが知っている植物として“タンポポ”があります。私たちがよく目にする“タンポポ”のほとんどはヨーロッパ原産のセイヨウタンポポです。多くの外来種は人や物の移動・輸送中に偶然に紛れ込み、日本に根付く場合が多いため、どのように日本にやってきたのか分からないことがほとんどです。ところが、セイヨウタンポポは「いつ、どこで、だれが、どんな目的で」海外から取り寄せたのか記録が残っています。まず、北海道

開拓期の1884年(明治17年)に札幌農学校のブルックスが作物として種の注文をしています。その後、1904年(明治37年)に牧野富太郎が学術雑誌「植物学雑誌」に発表した「日本のたんぽぽ」の中で「札幌ニ在テハ*Taraxacum officinale* Web.ノ歐品大ニ路傍ニ繁殖セリト聞ケリ」(原文ママ)と書いています。この文献から、当時の札幌では既に道ばたで海外原産のセイヨウタンポポ(現在の学名*Taraxacum officinale* Weber ex F.H.Wigg.)が繁茂していたことがうかがえます。そればかりではなく、セイヨウタンポポが北海道から「南進」し、もともと日本にある在来種と「混戦」する状況になるだろうと予見していました。現在、セイヨウタンポポはその予見通りに全国に広がり、在来種と交雑して形態的にも遺伝的にも「混戦」しています。

さて、最も身近なタンポポとなったセイヨウタンポポ以外にも、北海道には「タンポポ」と名のつくキク科の植物が生えています。和名だけで見



セイヨウタンポポ



両種の間中型?



エゾタンポポ

形態での見分けポイントは、開花時にセイヨウタンポポは「がく」にみえる総苞片が反り返って下向きになるが、エゾタンポポは反り返らないこと。しかし、開花時に少し反り返る中間的なものもあるなど、見た目での分類が難しいことがある。


写真は全て当センター敷地内で撮影。まさかエゾタンポポと思われるものまで見つかるとは思っていなかった!

ると在来種のエゾタンポポ、シコタンタンポポ、ヤナギタンポポなど、外来種の子キタンポポ、コウリンタンポポなどがあります。これらは花の色・形、葉や花の着き方など見た目の形が似通っています。

しかし、植物分類学では図のように違うグループに分かれます。もしかすると、春～初夏に咲き、茎の先に大きな黄色い花が1個だけついている草は全部「タンポポ」と呼んでしまいませんか?! 形やイメージで分けるのは誰にでも分かりやすく、共通認識も持ちやすいと思います。それを反映してか、和名は「～タンポポ」なのに、学問的には別のグループだなんて……。分類学も人間の営みの1つだと感じるところでもあり、ややこしいところでもあります。

右図: 札幌で確認されているタンポポの名をもつ植物の例。属名枠内の名前は、上段が和名、下段が学名。学名の命名者名は省略。外来種には和名の右に*を付けた。コウリンタンポポ属は過去にヤナギタンポポ属に含まれていたが、研究の進展により独立した。
参考図書: 大橋広好ほか編 2017. 「改訂新版日本の野生植物5」. 平凡社.

タンポポ属 *Taraxacum*




エゾタンポポ
Taraxacum venustum

シコタンタンポポ
Taraxacum shikotanense


セイヨウタンポポ *
Taraxacum officinale

ヤナギタンポポ属 *Hieracium*




ヤナギタンポポ
Hieracium umbellatum

コウリンタンポポ属 *Pilosella*



コウリンタンポポ *
Pilosella aurantiaca

フキタンポポ属 *Tussilago*



フキタンポポ *
Tussilago farfara

ホット
コラム

展示室につき
水槽の中の小宇宙

○月×日 展示解説員 西村 あまな



博物館活動センターには、水槽での展示があります。現在は、ヤナギモ、マツモ、コウキクサ、ガシヤモク、タヌキモの5種類の水草と、水中に住む生き物たちを観察することができます。

横のモニターでは、小さな生き物を顕微鏡で拡大して映しています。何を映しているかは、その日のお楽しみです♡

水槽の中にはプラナリアという生き物がいます。分裂してクローンで殖えることで有名な、ユニークな目をした平べったい生き物です。

「今日はいるかかな?」と虫メガネを片手に水槽を覗いていました。

何匹も見つかる日もあれば、砂や泥の隙間に入っていて見つけれない日もあります。

皆さんも、何度も観察しに来てみてください。新しい発見があったら、ぜひ教えてね!

春先によく来てくれたいた女の子が、来館するたびにプラナリアを探して、

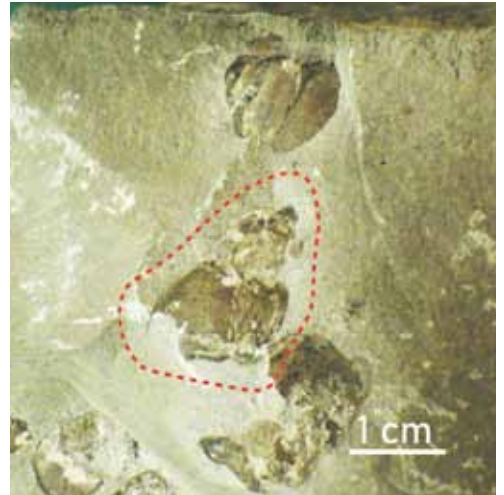


写真右上: 顕微鏡で拡大したプラナリア。全長1cmほど。

コレクション クエスト

ふだん公開していない
収蔵物を紹介します。
さあ、標本の世界を冒険だ！

今からおよそ2000
万年前前後(新生代
第三紀前期中新世)、
ユーラシア大陸の東
縁に亀裂が入り、淡水
～汽水の大きな湖が



標本No. SMAC 4809
種名:コササヒメタニシ
採取地:島根県松江市鹿島町古浦(こうら)
採取者:福岡 孝

形成されました。そこに棲息していた1cm前後の巻貝がコササヒメタニシです。島根県ではこの湖に堆積した泥岩の中にコササヒメタニシの化石を見ることができます。

やがて亀裂は拡大し、大陸の東縁部は太平洋側に押し出されて切り離され、日本列島の北海道西部以南になり、また閉じていた湖が開く形となって海水が流入し、日本海へと姿を変えていきます。それに伴い、コササヒメタニシなどの淡水の生き物は姿を消していきました。

文・写真/学芸員 古沢 仁

File No.15
完成! 小金湯産クジラ化石
復元骨格標本

SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、さまざまな活動を紹介しします。

現在、博物館活動センターでは2008年に小金湯で見つかったクジラ化石の調査研究を進めています。その成果の一つとして、化石から復元した骨格標本を製作しました。化石の発見から標本完成までには14年という歳月がかかりました。骨格標本が頭から尾まで組み合わさると、実に全長14mに及ぶ迫力です。それを、雪まつり期間中に開催したチ・カ・ホでのイベントや、札幌ドームで行われた「環境広場ほっかいどう2023」で展示し、多くの方にご覧いただきました。ご覧になった方は、大きさに圧倒されていたようです。普通に生活していたら、巨大なクジラが札幌に泳いでいたなんて想像もつきませんが、この化石が海だった時代の札幌の風景を想像させてくれます。



写真:チ・カ・ホで全身を展示した小金湯産クジラ化石復元骨格標本。南区小金湯の豊平川で産出した、およそ900万年前のセミクジラ科の1種であり、大型化したセミクジラ科としては、世界最古である。



交通アクセス

- 地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
- 地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

札幌市博物館活動センター information

入館料:無料
開館日:火曜～土曜 開館時間:10時～17時
休館日:日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス
二次元コード



発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel: 011-374-5002 Fax: 011-374-5014
Email: museum@city.sapporo.jp ホームページ: <https://www.city.sapporo.jp/museum/>



ミュージス・レターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。